



大阪+知的障害+地域+おもろい=創造

## 知の知の知の知

社会福祉法人大阪手をつなぐ育成会 社会政策研究所情報誌通算 3124 号 2016.7.12 発行

### なぜ教員を続けるのか——沖縄の非正規教員の語りからみえてきたもの

上原健太郎 / 教育社会学

シノドスジャーナル 2016年7月12日

#### 非正規から正規へ

非正規教員が増加している。

2014年7月6日付の読売新聞（朝刊）では、各地の公立小中学校で非正規教員が増加し、約12万人と全体のおよそ16%を占めていることが報じられた。まさに、6人に1人が非正規の教員である。

なぜ、非正規教員（注1）が増加しているのだろうか。詳細な説明については、拙稿「正規教員を目指すことはいかにして可能か——沖縄の非正規教員を事例に」（2016、『都市文化研究』Vol.18, pp.71-83）をご参照いただきたいが、ここでは、その問題を端的に言い表した次の金子真理子（2014：45）の指摘を引用しよう。

教員給与制度改革の経緯を振り返れば、地方の財政状況の悪化のなかで、予算を縮減しながら効率化を図ろうとする思惑が見えてくる。ここには、正規教員の仕事を非正規教員に代替させる搾取の構造が見え隠れする。

財政的な事情により生み出された非正規教員。となると、教員志望の若者のキャリアにも当然それは影響してくる。

舞田敏彦（2013）によれば、地域差はあるものの、全国的な傾向として

- (1) 教員の非正規化
- (2) 教員採用試験の難関化
- (3) 新規教員採用の高齢化

が確認できるという。その上で舞田は、「新卒」ですぐに採用されるのではなく、非正規教員として働きながら採用試験に複数回トライする「浪人組」の存在を指摘している（舞田2013：275-6）。

それでは、「非正規から正規へ」というキャリアパターンを歩もうとする教員志望者は、具体的にどのような状況に置かれているのだろうか。本論では、沖縄の若者に対する聞き取り調査のデータをもとに、非正規教員の現状についてみていきたいと思う。

というのも、沖縄の学校現場で働く若年教員の多くが、卒業後しばらくの間、非正規教員として働きながら正規教員を目指すのだ。学校教員基本調査（2013年度）の最新のデータをみると、公立小学校の新規採用教諭の69.0%が「25～34歳」であり、そのうちの77.7%が採用前の状況を「既卒」と回答している（全国はそれぞれ38.0%、48.9%）。また「既卒」の内訳をみると「非正規教員」（注2）が80.0%を占めている（全国79.9%）。

つまり、「非正規から正規へ」というキャリアパターンを考える上で、沖縄の若者はふさわしい事例であると言える。

#### 非正規としての過酷さ

学卒後しばらくの期間、非正規教員として働きながら採用試験に挑み続ける沖縄の若者たち。調査対象者のなかには、大学在学中に民間企業への就職活動を行いつつ、採用試験に向けて勉強に励む者もいる。

しかし、どちらかといえば、民間企業への就職は考えず、就職先を教員一本に絞っている者が主流であった。以下のアキコさん（第1回目調査 当時 23 歳）の語りはその典型である。アキコさんは、県外の私立大学に進学したものの、卒業後は地元沖縄に U ターンした（注 3）。

——えっと、沖縄にはもう帰ろうって思った？

うーん……うん。なんだろう、もうふと思って…。実習終わってからかな。沖縄で教員になりたいなって思ったのが一番かな。

——民間に就職しようとは

就職は……みんな周りは就活してたけど、うん、全然悩まなかったかな。

——焦りもせず？

うん、焦りもせず。マイペースだね（笑）。

調査を通じて興味深かったのは、「新卒」採用への強いこだわりがほとんど語られなかった点である。対象者の若者たちは、卒業後の非正規雇用を見越した上で正規就職を考えていたのかもしれない。

むしろここで指摘しておかなければならないのは、沖縄という地域への強いこだわりだろう。「沖縄で教員になりたいな」というアキコさんの語りは、地元志向が強いとされる沖縄の若者のまさに典型的な語りである。加えて、中小零細企業中心の県内労働市場を背景に、沖縄出身の大卒者の多くが、教員や公務員といった職業に強いこだわりを示す傾向にある。要するに、「地域」と「職業」の両方にこだわることで、沖縄の大卒者の多くが、狭隘な地元大卒労働市場に参入することになるのだ（上原 2014）。沖縄で教員を目指す若者のキャリアは、こうした地域的な文脈のなかで理解する必要がある。

さて、大学卒業後、教員志望者の多くは非正規教員として働くことになるわけだが、どのような手続きを経てそのキャリアをスタートさせるのだろうか。

自治体によって異なるだろうが、沖縄の場合、各地域を管轄する教育事務所や沖縄県教育庁に履歴書と教員免許証の写しを提出し、非正規教員希望者として登録することからそれは始まる。登録期間は4月1日から3月30日までの1年間。登録が済んだ者は、新年度採用の内定の連絡を待つことになる。2月下旬頃から採用通知が行われ、3月末に連絡があることも少なくない。つまり、登録者は、直前まで採用結果がわからない状況に置かれている。

採用が決まれば、4月以降の生活にある程度の見通しが立つことになる。とはいえ、非正規教員の採用期間は最長でも半年更新の一年間であるため、期間が終了すると直ちに生活の見通しが立たなくなる。同じ勤務先で非正規教員として継続勤務する者もいるが、それは、学校側や教育事務所がその非正規教員の継続勤務を希望し、また本人もそれを希望する場合に限る。

その場合でも、形式上はいったん雇用契約がきれるため、再度、非正規教員として願書を提出し、登録する必要がある。いずれにせよ、有期雇用であることに変わりはない。

非正規教員が有期雇用であるということは、同時に、さまざまな学校現場を転々とすることをも意味する。その点、次のユキエさん（当時 26 歳）の語りは興味深い。

——やりがい自体は感じる？

感じる……けど、やっぱり臨時は途中から切れてしまったり、実際に私はここは7月までなんですよ。また本務の先生が戻ってこられるので。そのあとのことはよくわからないんですけど、まだ。はっきり決まってくなくて。

ユキエさんに対して筆者が調査を行なったのは2011年6月であった。彼女は翌月の7月に雇用契約が切れ、それ以降のスケジュールは未定だと話す。

ここで少し補足すると、彼女が現在の職場に非正規教員として赴任したのはちょうど2ヵ月前の4月であった。つまり、彼女は3ヵ月という短い雇用契約のもと、「本務の先生」の代わりに教壇に立っていたことになる。また、やりがいは「感じる…けど」のすぐ後に「在籍期間の短さ」について語っていることから、その「短さ」が否定的なニュアンスで語ら

れていることがわかる。

次に、非正規教員として教壇に立つことについて考えてみよう。正規採用された 1 年目の教員には初任者研修という研修が義務づけられているが、非常勤講師であったアキコさん（第 2 回目調査 当時 28 歳）は、初任者研修の期間、初任者の代理としてクラスを任された。

非常勤とかも自分でやってみたら、けっこう辛かったりもあつたり。担任じゃないから、なんていうの、担任だったらもっと（生徒に）言えるはずだけど。遠慮する。私が口出しするもんじゃないなど。初任者（正規教員 1 年目の人）のスタイルと自分のスタイルが全然違った。（…略…）この先生と同じようにはやりたくはないし、けどこの先生には「こういう風にやってね」とも言われたりするし。なんていうの、「あいだ」というか。自分が担任だったらやっぱりできるけど。非常勤だから。

### ——ストレスたまるな

そう、けっこうストレスたまつたこれは。

アキコさんは、正規の担任ではないという理由で、正規教員に対して「遠慮」していたと話し、思うように学級運営ができないことに「ストレス」を感じたという。

先の事例と合わせて考えてみると、非正規教員としての過酷な現状が浮かびあがってくる。それは、在籍期間の短さによる不安定さや、実際の学校現場において生じる、正規教員との非対称な関係である。そしていずれの場合も、非正規教員にとって、ネガティブな経験として意味づけられていた。

正規教員との非対称性という点で、次のヒロシさん（当時 31 歳）の語りも重要だ。

（正規教員の人は）「忙しい忙しい」って言いますけど、僕からしたら忙しくないだろって思ってます。なんで、早く学校に来て準備して 17 時になったら帰ったらいいんじゃないの？って。僕はそれから 23 時くらいまで勉強するので。（…略…）いやあもう、ストレスとの闘いです。

ここですべてを紹介することはできないが、「試験勉強の時間が確保できない」という焦りや葛藤は、他の対象者からも異口同音に語られた。ここにも、非正規教員としての過酷な現状がみてとれる。

### 和らげつつ、囲い込む

なぜ、非正規であるにも関わらず、若者は仕事を続けるのであろうか。

話を聞いているうちに、「いずれ正社員になることが期待できるから」だけでは説明できない理由が浮かび上がってくる。

#### (1) やりがい

第一に、教員としてのやりがいがある。ここでもヒロシさんの語りを引用しよう。

——沖縄の民間企業受けたいなって思ったことないですか？

ああ、ないですね。

——このへんの企業といますか

企業はないですね。

——考えたこともないですか？

ないですね。この仕事は楽しいなって思ってやっているので。

——先生諦めて、ちょっとハローワーク行って

先生諦めてっていうのはないですね。

——受かるまでやり続けるって感じですか？

やると思いますよ。まあ心折れたりもしてるんですけど、結局、自分の一番得意な場所であるので。

ヒロシさんは、民間企業ではなく、あくまで正規教員としての就職を希望している。その理由としてあげているのが「やりがい」である。「心折れたりもしてるんですけど」という語りからもうかがえるように、過酷な状況に置かれながらも、やりがいという条件がその状況を和らげている。

## (2) 高い給料

また、給料面も見過ごすことはできない。タツヤさん（当時 32 歳）は調査対象者のなかで唯一結婚し、子どもがいた。タツヤさんは、仕事と育児を両立させながら勉強時間を確保することが難しいと語り、非正規教員を辞めて試験勉強に専念することを配偶者に提案されたという。

それにもかかわらずタツヤさんは、「まだ子どもがいなくてとかだったら考えるんですけど、どうしてもやっぱり子どもがいるので、なかなか踏み切れないというのが現実」と話した。他にもタツヤさんは、現在の仕事を辞めることができない理由を次のように話した。

### ——（臨時教員になって）生活状況は変わりました？

そうですね、もうだいぶ、ゆとりというか、貯金ができるようになりましたね。（…略…）まあ今、臨時とはいえ、良い給料もらってるので、なかなか、これ辞めたら、次の仕事できっとこの給料はないだろうなって思っているの。っていう、へんな話、腹黒い話ですけど。

不安定な状況に置かれているとはいえ、非正規教員の給料が「良い給料」として認識されていることがわかる。平均賃金が全国で最も低く、県内の所得格差が非常に大きい沖縄の経済的特性（上原 2013）において、公務員である非正規教員の給料は沖縄県内で優位な条件としてある。そしてその条件が、非正規教員の過酷な現状を支えているのである。

## (3) 仲間の存在

ある調査によると、沖縄の学校現場で働く 20 代教員の 8 割強が非正規教員である（琉球大学教育学部 2011）。学校現場や日常生活において、同じ状況に置かれた他者とはどのような存在なのだろう。例えばアキコさんは、教員志望の友人と二人三脚で試験勉強に励んだ日々を次のように振り返る。

仲間の存在は大きいわけ。

### ——1人じゃきついもんね

そうそう、1人じゃもう眠ろうって感じだった。本当に仲間の存在が大きくてできたかも。頑張ったよ。

こうした仲間の存在が、非正規教員としての過酷さを和らげ、勉強時間の確保がなかなか難しい現状を乗り越えるために機能している。

以上、やりがい、高給、仲間の存在について順番にみてきた。他にもさまざまな条件が指摘できるだろうが、ここではひとまず、この 3 つ条件の「別の側面」に注目したい。というのも、過酷な状況を和らげるその条件には、一方で、教員志望者の若者を教員世界へと囲い込む側面がはっきりと確認できるからだ。

例えば、やりがいの事例としてとりあげたヒロシさんの語りからは、民間企業への転職がそもそも選択肢になかった。「これ辞めたら、次の仕事できっとこの給料はないだろうなって思っているの」というタツヤさんの語りからも、高給であるがゆえに、他の職業への転職機会が制限されている点が確認できる。仲間の存在も正規教員を目指し続けることを可能にしているだろう。

要するに、やりがい、高給、仲間の存在は、過酷な現状を和らげつつも、一方で、その現状に非正規教員を囲い込む。さらにいうと、前述したように、そもそも沖縄の大卒者の多くは「地域」と「職業」の両方にこだわるため、狭隘な地元大卒労働市場に参入することになる。その意味でも、非正規教員は二重にも三重にも囲い込まれているのだ。

非正規教員はそのなかで、「正規教員になる」という自らの期待を維持しなければならない。囲い込まれた過酷な現状から抜け出すためには、勉強時間を確保し、教員採用試験に合格することが求められる。

### 正規教員を目指し続けた先に

正規教員を目指すという営みは、非正規教員の若者にとって、囲いこまれた現状からの脱却を意味する。調査対象者のなかでも、唯一、その脱却に成功したのは仲間の存在の事例で紹介したアキコさんだけであった。

正規教員を目指し続けることは、大変なことでもある。調査当時 36 歳であったトモコさんは、対象者のなかでも、非正規教員経験年数が 14 年ともっとも長く、県内の 11 の小学校を転々としてきた。

トモコさんを心配する両親は、彼女が正規教員として採用されることを強く望んでいる。それに対し、トモコさんは、「一人だから、食べていけばいいかなって。仕事も、別に怠けているわけではないし」と語った。実のところ、トモコさんは、採用試験を毎年受験しているわけではない。

#### ——試験の方は毎年

うーん、受けてたり受けなかつたり。

#### ——受けていない年というのは、やっぱり、忙しかつたり

そうですね。勉強もしてないのに受けるのはどうかなっていうのもあって。頑張れないときは受けていません。(…略…) なんか、試験は受かっても受からなくてもいいのかなあって気持ちが最近、とくに思っていて。やっぱり、子ども(生徒)たち中心に働きたいので、自分が勉強し過ぎて寝不足で、子どもたちにうまくできないくらいだったら試験受からなくても、そのまんま、臨時の仕事があればありがたい。(…略…) この子たちのために自分が頑張ればいい。自分のことは二の次。

受験しない年がある、というトモコさんの語りは、非正規教員の過酷な現実を物語っている。受験しないことは、非正規教員としての現状を受け入れることに他ならない。「受かっても受からなくてもいいのかなあ」という語りに端的に表れているように、時間が経過するなかで、正規教員への期待を維持することが徐々に難しくなっているのである。

と同時に、「怠けているわけではないし」「生徒のために」といった語りが示すように、その過酷な現状に自ら「折り合い」をつけようともしている。特に、「生徒のために」といった教員固有のロジックによって、より正当化を強化しているともいえる。

#### 沖縄の非正規教員からみえてきたもの

ここまで、正規教員を目指す沖縄の非正規教員の事例を紹介してきた。彼らは、「試験勉強の時間が確保できない」過酷な状況に置かれている。しかしながら、彼らは非正規教員を続けていく。なぜなら、「やりがい」や比較的「高い給料」、「仲間の存在」によって、囲い込まれているからだ。そのなかで、時間の経過に伴い、「生徒のために」と試験を受けることを諦めていく人もいる。

これらの問題は、沖縄特有の問題ではないだろう。6 人に 1 人が非正規である全国の教育現場でも、同様の事態が起こっていることが想像できる。特に、狭隘な大卒労働市場を特徴とする地方の場合はより事態は深刻だろう。なぜなら、地元に着する若者が増加傾向にある今日(堀 2015)、ただでさえ狭隘な大卒労働市場への、大量の応募が今後も予想されるからだ。その上、地方自治体の財源不足が問題化している現状がある。これらを踏まえると、「新卒」採用という「正規ルート」を歩まない／歩めなかった非正規教員のような地方の若者が増える可能性は非常に高い。

しかし、わたしたちは「大学生の就職活動」と言うとき、民間企業の「新卒」採用を思い描いている。そして、その認識からは、教員志望の若者一学卒後しばらくの期間、非正規教員として働きながら正規就職を目指す若者一〇の姿を想像することは難しい。そのことが、非正規教員の現状をより見えづらくしているのではないだろうか。しかし、財政上の問題で生み出された非正規教員の現実を無視していいはずがない。従来の認識からこぼれ落ちる「大学生の就職活動」をいかにして拾い上げることができるのか。新たな視座が求められている。

#### 【注】

(注 1) 本論では、常勤講師(臨時的任用教員)・非常勤講師の両方を指して「非正規教員」と呼ぶ。「常勤講師は正規教員と同じくフルタイム(週約 40 時間)働き、学級担任もできる。非常勤講師は『直接担当する授業時間だけ』『週 20 時間』といった限られた時間の指導を担う。いずれも、非正規の身分で教壇に立ちながら正規採用を目指す人が多い」(朝日新聞、2010 年 10 月 23 日、夕刊)。前者に関しては、地方公務員法第 22 条 2 項(1950 年施行)において次のような規定がある。「任命権者は人事委員会規則で定める

ところにより、緊急の場合、臨時の職に関する場合又は任用候補者名簿が無い場合においては、人事委員会の承認を経て、6月をこえない期間で臨時的任用を行なうことができる」。なお今回は、紙幅の都合上、公立の小中高校の教員に議論を限定する。

(注2) 便宜的に、「臨時的任用教員(常勤講師)および非常勤講師」を「非正規教員」に再カテゴリー化した。以降、非正規教員の語りを検討するなかで「臨時」「非常勤」などの語を適宜用いるが、互換的な意味で使う。

(注3) 沖縄の若者のUターンについては、谷富夫・安藤由美・野入直美編(2014)の「第1部 沖縄社会の基礎構造」を参照。

#### 参考文献

堀有喜衣、2015、「調査研究の目的と概要」独立行政法人労働政策研究・研修機構『若者の地域移動—長期的動向とマッチングの変化』162、1-11頁。

金子真理子、2014、「非正規教員の増加とその問題点—教育労働の特殊性と教員キャリアの視角から」『日本労働研究雑誌』645、42-45頁。

舞田敏彦、2013、『教育の使命と実態—データからみた教育社会学試論』武蔵野大学出版会

琉球大学教育学部、2011、『沖縄県内の公立小学校・中学校・高等学校教員の現職研修に関する調査 第1次報告書』

谷富夫・安藤由美・野入直美編、2014、『持続と変容の沖縄社会—沖縄的なるものの現在』ミネルヴァ書房  
上原健太郎、2013、「沖縄県における経済的特性と不平等」『沖縄における階層格差と人権』2012年度龍谷大学人権問題研究委員会助成研究プロジェクト中間報告書、龍谷大学、6-14頁。

上原健太郎、2014、「沖縄大卒者のローカル・トラック」谷富夫・安藤由美・野入直美編、2014、『持続と変容の沖縄社会—沖縄的なるものの現在』ミネルヴァ書房、83-105頁。

**持続と変容の沖縄社会：沖縄的なるものの現在**

著者/訳者：谷 富夫 野入 直美 安藤 由美

出版社：ミネルヴァ書房(2014-05-10) 定価：¥ 4,860 Amazon 価格：¥ 4,860

単行本(304ページ) ISBN-10: 4623070344 ISBN-13: 9784623070343

上原健太郎(うへはら・けんたろう) 教育社会学

1985年生まれ。大阪市立大学大学院文学研究科 都市文化研究センター研究員。大阪市立大学大学院文学研究科単位取得退学、修士(文学)。専門は、教育社会学、沖縄研究。主要論文は、「ネットワークの資源化と重層化—沖縄のノンエリート青年の居酒屋経営を事例に」(2014、『教育社会学研究』95)、「沖縄大卒者のローカル・トラック」(2014、

谷富夫・安藤由美・野入直美編『持続と変容の沖縄社会—沖縄的なるものの現在』、ミネルヴァ書房)など。

#### 春秋

日本経済新聞 2016年7月12日

疎開先の長野県から焼け野原の東京に戻った中学生の永六輔さんは、戦災孤児が仲間だった。親もいなければ家もない子どもたちと、焼け跡を片付け金目の物を集めてお金をつくり、おなかを満たそうとした。映画に夢中になり、NHKのコントに投稿していたころだ。▼浅草の浄土真宗の寺の四男。もともと寺は地域の教育を担ったり、恵まれない人の世話をしたりしてきた。「全然意識しなかったが、福祉やボランティア活動を中学からやっていた」。阪神大震災では被害を受けた障害者を助ける基金の代表に就いた。困っている人たちを応援する気持ちが自然に身についていたのだろう。▼1959年に尺貫法が廃止になり、計量単位はメートルやグラムに統一される。直角に曲がった曲尺(かねじゃく)や布を測る鯨尺(くじらじゃく)の製造が禁じられたことに、ラジオや講演で異論を唱え続けた。「大工の仕事や着物など、日本の伝統は尺貫法で成り立っている」。製造禁止という国の乱暴なやり方に、黙っているわけにはいかなかった。▼「お上」が決めたことだから仕方がないと、曲尺や鯨尺が使えないのを我慢していた職人たちも、声をあげ始めた。77年、尺の物差しは再度、製造販売を認められるようになる。放送作家や作詞の仕事でも、庶民と同じ目線を持ち続けた。「上を向いて歩こう」や「こんにちは赤ちゃん」は、これからも歌い継がれていく。

永六輔さん、兵庫ともゆかり 震災後は障害者支援

神戸新聞 2016年7月11日

神戸市内の商店街を訪れ住民らと交流した永六輔さん＝2004年4月、神戸市兵庫区荒田町1



多彩な活躍で知られる放送タレントの永六輔さんが7日、83歳で亡くなった。

永さんは30代の一時期、神戸市で暮らしたといい、阪神・淡路大震災後は被災者の支援を続けるなど兵庫県ともゆかりがある。

震災を機に発足し、被災した障害者に救援金を届けるNPO法人「ゆめ風基金」(大阪市)。永さんが呼び掛け人代表を務めた。基金を発案した一人で、自らも障害のある牧口一(いちじ)代表(78)は「僕らを助けよう、草の根活動を支えよう」という本気を強く感じさせてくれた。大好きな人」とかみしめた。

今年5月には同法人の橘高千秋事務局長(64)が病床の永さんを見舞った。熊本地震の支援活動を伝えると、永さんは「頑張ってくれているね」と喜んだという。「永さんの応援を励みに、今後も活動に力を入れたい」とする。

講演会に永さんを招くなど交流があった神戸市中央区の画廊主、島田誠さん(73)は「知らぬ人がいないようなビッグネームなのに、どんな人にも自然体で、対等のまなざしで接しておられた」と振り返る。命の不思議などをテーマにした絵本「いのち」を共作した明石市の画家、坪谷(つぼや)令子さん(68)も「難しいことを易しい言葉で、面白く語り伝えられる人。日本にとって大事な人をまた失ってしまった」と嘆いた。

永さんは上方芸能を研究しようと30代初めに関西に移住。神戸市垂水区で1年ほど暮らしたという。著書には、オリエンタルホテルの名物ホテルマンだったハンガリー人・岸ラヨシュさんら、当時の神戸で出会った人も登場する。2000年には、神戸夏季大学(神戸新聞社主催)の講師を務めた。(阿部江利、堀井正純、田中真治)

永さんは上方芸能を研究しようと30代初めに関西に移住。神戸市垂水区で1年ほど暮らしたという。著書には、オリエンタルホテルの名物ホテルマンだったハンガリー人・岸ラヨシュさんら、当時の神戸で出会った人も登場する。2000年には、神戸夏季大学(神戸新聞社主催)の講師を務めた。(阿部江利、堀井正純、田中真治)

すべての人に基礎教育を 基礎教育保障学会設立へ しんぶん赤旗 2016年7月11日

人が人として生きていくために必要な基礎教育をすべての人に保障する社会を。10日、「基礎教育保障学会」設立大会に向けた記者会見が東京都内で開かれました。

夜間中学や社会教育、外国人支援、子どもの貧困、障害者など多分野の研究者や運動家が呼びかけ人になっています。

呼びかけ人のひとり、岩本陽児和光大学教授が報告。「義務教育の学びからこぼれてしまった人が100万人以上いるなかで、夜間中学や社会教育の充実など学ぶ機会をすべての人に保障する社会づくりを探究したい」と話しました。

添田祥史福岡大学准教授は、基礎教育について「義務教育を基本としつつ、就学前教育、職業教育、成人識字教育など幅広い教育をさす」と述べました。

夜間中学に56年間、携わる見城慶和さん(えんぴつの会)は若者の現状に心を寄せ、「ひきこもり」などで約220万人が社会参加できていません。形式的な『卒業』など義務教育を形骸化させるのではなく、実質的な学びを保障していきたい」と話しました。

現在、夜間中学に通う女性(27)も発言。「中学校が学級崩壊し、社会に出たときに“学び”が欠落していると実感した。貧困の連鎖を防ぐためにも学力は大切。『会』の設立に勇気付けられている」と話しました。

設立大会は8月21日、東京都の国立国語研究所で開かれる予定です。

入所者負傷させ罰金 施設の男性職員 押してこかし骨折させ 京都

産経新聞 2016年7月11日

京都府南丹市の障害者支援施設「あけぼの学園八木寮」で、知的障害がある男性入所者

にけがを負わせたとして、右京区検は11日までに、重過失傷害罪で男性職員（23）を略式起訴した。施設によると、右京簡裁が罰金10万円の略式命令を出した。今後、理事会で職員の処分を決めるという。

起訴状によると、昨年9月19日、施設で入所者の左肩付近を強く手で押して制止し、転倒させて右太ももの骨を折るなどのけがをさせたとしている。4月に南丹署が傷害容疑で書類送検した。

## 木工や清掃など7種で腕前競う 矢巾、県障害者大会 岩手日報 2016年7月11日



### 真剣な表情で木工品の制作に取り組む選手

県と高齢・障害・求職者雇用支援機構岩手支部（長友邦宏支部長）は10日、矢巾町南矢幅の県立産業技術短期大学校で第14回県障害者技能競技大会（チャレンジいわてアビリンピック2016）を開き、障害者が木工や清掃など7種目で日ごろ培った技術を競った。

県内の支援学校の生徒や事業所で働く15歳以上の障害者39人が出場。パソコンのデータ入力や喫茶サービス、木工など7種目を行った。

木工はトレーの製作、喫茶サービスは飲み物などの注文を受け客に運ぶ課題などに真剣な表情で取り組んだ。

## 「トビウオパラジャパン」障害者水泳代表の愛称決定 日刊スポーツ 2016年7月11日

障害者水泳の日本代表チームの愛称が11日、発表され「トビウオパラジャパン」に決まった。日本水連の了承を得て健常者の競泳代表チームの「トビウオジャパン」にちなみ、ロゴも同じマークに「PARA」の文字を加えたものを使う。2020年東京パラリンピックに向け、一体で競技を盛り上げるのが狙い。同日、東京都内で開かれた記者会見にはリオデジャネイロ大会の代表選手が出席。チームの主将を務める山田拓朗（NTTドコモ）は「パラは取り上げられることが多くなったが、実力を認めてもらわないといけない。世界で上を目指す努力がもっと必要」と決意を新たにした。

## 老化を抑える？期待のサプリ 慶応大など臨床研究 瀬川茂子

朝日新聞 2016年7月12日

慶応大と米ワシントン大は11日、動物実験で老化を抑える可能性が示された物質「ニコチンアミド・モノヌクレオチド（NMN）」の安全性を確かめる臨床研究を始めたと発表した。病気の予防や健康長寿に役立つ栄養食品として効果を調べていくという。

NMNは、体内のエネルギー代謝に欠かせない「ニコチンアミド・アデニンジヌクレオチド（NAD）」に変化する。マウスの実験では長寿にかかわるサーチュインと呼ばれる遺伝子を活性化させることや糖尿病の治療効果などが示されている。NADは人の体内で作られているが、加齢に伴い様々な臓器で減少するとされる。

まずは40～60歳の健康な男性10人にNMNを摂取してもらい、安全性や吸収のされ方を調べる。慶応大の伊藤裕教授（内科学）は「安全性が確認されたら、加齢とともに少しずつ低下する臓器の働きを上げる効果があるのか、科学的な検証をしていきたい」と話している。（瀬川茂子）



月刊情報誌「太陽の子」、隔月本人新聞「青空新聞」、社内誌「つなぐちゃんベクトル」、ネット情報「たまにブログ」も  
大阪市天王寺区生玉前町5-33 社会福祉法人大阪手をつなぐ育成会 社会政策研究所発行